言心先生の中国便り

自信と不自信

最近、中国の有名な評論家が海外出版した「晩年周恩来」という本の批判文書が、ネットで登載された。短い時間で数百の投書と一万以上の賛成と反対の意見が掲載された。筆者は、「まずこの本を中国で出版してから、批判した方が公平ではないか」という呟きをネットで出した。数分間で約数十件の賛同意見が出てきた。しかし、残念なことに、間もないうちにこの呟きは消されてしまったのである。

一昨年の日中領土紛争と年末の安倍総理の靖国参拝問題で、日中両国の間で、大きな論争が起こった。まるで中国の諺の「公説公有理、婆説婆有理」の状態に陥れと、双方が一歩も譲れないのである。

筆者は、具体的な紛争、分岐の是非を論争する前に、まず論争の環境を整理する必要があるのではないかと思う。先日、駐日本の中国大使は「毎日新聞」に安倍総理の靖国神社参拝を批判する文書を投書した。それに対して平等に、駐中国の日本大使は、「人民日報」で弁明の文書を掲載した方がいいのではないか。

今、中国の中央テレビ（CTV）と中国系の香港フェニックステレビが毎日日本で放送されている。重要なニュースと評論が、日本語の通訳を通して同時に放送されている。最近、その内容の相当の部分は、日本批判である。一方、中国でのアメリカのCNNテレビと日本のNHKテレビの放送が、もし中国政府に不都合な内容を含む場合、それはすぐに消されてしまう。当然不公平はこれだけではなく、中国ではネット上でも「万里の長城」が作られてきた。昔の万里の長城は外敵を退治するために建築されたが、今の万里の長城は外国と台湾・香港からの不都合な情報を排除するため作られてきた。本当に理不尽で、皮肉な事である。

中国の新聞、ネットでは時々日本の専門家の尖閣と靖国の問題においての中国寄りの意見を引用される。もし、逆の事が起きたら、日本の立場寄りの中国の専門家は、身の安全が保障されるかどうか疑問視するだろう。国の強さは、経済力、軍事力で判断されるではなく、異文化と内外の反対意見に対する柔軟と容認の程度で判断されるべきだと思う。

自国国民の是非の判断を信頼しないため、力により内部と外部の不都合な意見を排除する国は、まさに孤独な裸の王様である。